

聖書日課 『からし種』 2026.8.2－8.9

8月2日 (日) サムエル記下 9章	「ダビデは言った。『サウル家の者がまだ生き残っているならば、ヨナタンのために、その者に忠実を尽くしたい』」(1節)。ダビデとヨナタンは、互いに深く愛し合い、主に契約を結んで(サムエル記上 18・20)いた。ヨナタンが示した深い友情に対して、ダビデもその死を嘆き、彼に忠実に尽くすため、ヨナタンの息子 メフィボシエトを王子のようにその食卓に招いた。
3日 (月) サムエル記下 10章	「ダビデは『ハヌンの父ナハシュがわたしに忠実であったのだから、わたしもその子ハヌンに忠実であるべきだ』と言って」(2節)。ダビデのハヌンに対する「忠実(誠実さ)」を、主は王としてふさわしい心として選ばれたのだろう。その逆にハヌンのダビデに対する態度はその心の欠けをまざまざと見せつける。隣人への信頼と愛を持ち続けられるよう祈り求めたい。
4日 (火) サムエル記下 11章	「喪が明けると、ダビデは人をやって彼女を王宮に引き取り、妻にした。彼女は男の子を産んだ。ダビデのしたことは主の御心に適わなかった」(27節)。主に油注がれて王となったサウルは妬みにより王の座から追われ、次に選ばれたダビデは肉の欲によって主の御心から逸れてしまった。権力を得た者が、神の求めに応じて力を用いることは容易ではない。
5日 (水) サムエル記下 12章	「『子がまだ生きている間は、主がわたしを憐れみ、子を生かしてくださるかもしれないと思ったからこそ、断食して泣いたのだ。だが死んでしまった。断食したところで、何になろう。あの子を呼び戻せようか。』」(22－23節)。我が子を失ったダビデの涙は心からの嘆きであっただろう。しかし彼の心の内に、自分の嘆きならば神に聴かれるという驕りはなかったか。

メール配信登録メール senfkorn.obc@gmail.com

大井バプテスト教会

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

聖書日課 『からし種』 2026.8.2－8.9

6日 (木) サムエル記下 13章	「そして、アムノンは激しい憎しみを彼女に覚えた。その憎しみは、彼女を愛したその愛よりも激しかった。アムノンは彼女に言った。『立て。出て行け』(15節)。人の愛というのは、どれほど身勝手なものであるかと知らされる。さらに、この身勝手な人の愛は、さらなる怒りや憎しみを生み出す大きな罪の原因になってしまうことをも示している。
7日 (金) サムエル記下 14章	「アブサロムは部下に命じた。『見よ、ヨアブの地所は私の地所の隣りで、そこには大麦の畑がある。行ってそこに火を放て。』アブサロムの部下はその地所に火を放った」(30節)。 旧約聖書は、様々な人々の物語をわたしたちに示してくれる。また、その物語は「神に僅かに劣るものとして」造られたわたしたち人と神との「僅か」の差のはるかな大きさを示す。
8日 (土) サムエル記下 15章	「イタイは王に答えて言った。主は生きておられ、わが主君、王も生きておられる。生きるも死ぬも、主君、王のおいでになるところが僕のいるべきところです」(21節)。我が子の反逆にあって、嘆き逃亡するダビデに対して、このイタイやフシャイなど、彼を信頼し支え続けようとする友がいる。完全では無い人は、祈り支え合う友と共にあって生きるものとなる。
9日 (日) サムエル記下 16章	「ダビデは…言った。『(アビシャイは)主の御命令で(わたしを)呪っているのだ』」(11節)。かつてダビデがウリヤの妻を強奪した際、主は「剣はとこしえにあなたの家から去らない」と語られた(12:10)。アビシャイの侮蔑を浴びながらダビデは主の厳しい裁きの言葉を思い起こしたことだろう。主の前に心低くされるダビデ。しかし、そこが主に従う信仰の再起点となる。